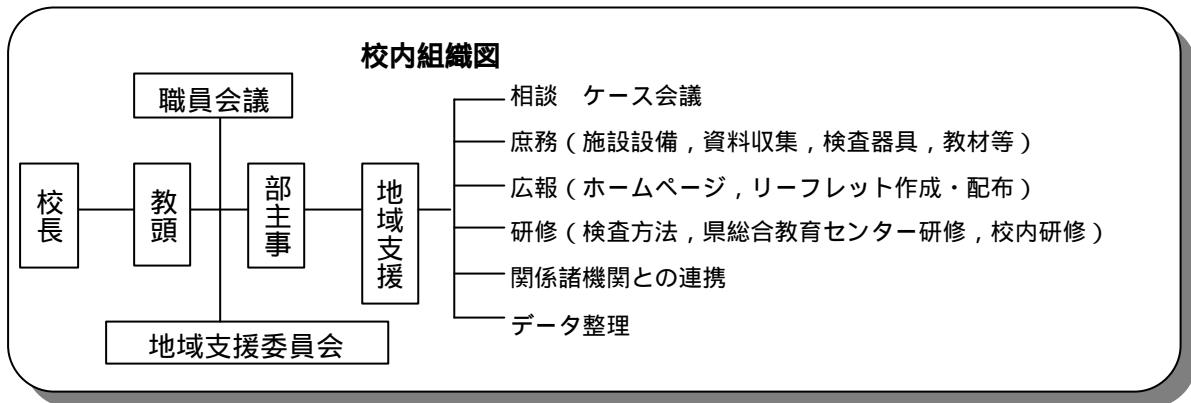


## 【実践事例 2】 愛知県立安城養護学校

### 1 概要

本校は、平成 15 年度から校務分掌に地域支援部を設置した。地域支援部の主な業務は、障害のある子供とその保護者に対する教育相談である。地域支援部の新設と合わせて、相談をより機能的、多角的に進めたり、養護学校の特別支援教育のセンター的役割を全校的な体制の下で検討したりする場として「地域支援委員会」を設け、校内組織に位置付けた。

地域支援部では、教育相談（あゆみ相談）のほかに、研修支援活動、巡回相談、巡回指導の四つの業務を中心に行っている。



#### (1) あゆみ相談の概要

相談の名称については、一般の相談者に堅苦しいイメージを与えないように、親しみやすく子供の成長をイメージできる「あゆみ相談」とした。会場は、養護学校に対する保護者等の心理的抵抗感に配慮し、安城市立西部小学校の特別教室を借用することになった。また、相談者が養護学校に抵抗が無く、居住地が距離的にも近い場合は本校で行うこともある。

#### (2) 研修支援活動

地域の小中学校の依頼により、発達障害についての研修会に講師として参加したり、研究会、事例検討会等に助言者として参加したりしている。また、安城中部小学校と連携し、両校において研修会、事例検討会等を実施した。

#### (3) 巡回相談

安城中部小学校へは、研修支援活動と並行して、学級担任等との教育相談を行った。また、安城市以外の地区においても、幼稚園、保育所、小中学校等を訪問し、教育相談を行った。

#### (4) 巡回指導

巡回指導については、西三河地区を担当し、地域支援部の教員が中心となって実施した。

## 2 事例

### (1) あゆみ相談（担任，特別支援教育コーディネーター，相談機関との連携）

<相談事例 7歳・自閉症 通常の学級に在籍> 文中の太字部分は連携を図ったところを示す。

#### 生育歴

1歳半健診で歩行ができないことを指摘されたが、受診せず、2歳で歩き始める。3歳児健診では発語が単語程度のため、保健センターで相談するよう勧められたが行かなかった。

#### 相談の経過

初回到母親と本児が特殊学級担任とともに来所した。

そこでは、母親から「会話に一貫性がなかったり学習面の遅れがあるがどうしたらよいか。また、ふだんの生活の中での効果的な働き掛けを知りたい。また、担任の先生と連携を図るためにどうしたらよいか、宿題や家庭学習の取り組み方、精神面での成長や自立心を育てるために家庭でできることは何か」のお尋ねがあった。母親は通常の学級で学習等を続けさせたいが、本児のためには特殊学級にかわった方がよいかどうかを中心に話していくことにした。

更に母親から健診で遅れを指摘されたものの、兄姉もそうだったからと気にせず、医療機関等に受診しなかったということや入学前から通常の学級での学習についていけるかを心配し、学校で使うドリルを買って何度も事前に学習させたことなどもうかがった。

また、学級担任からの手紙の中で、「今日の予定を何回も確認しに来る、言葉での指示だけではみんなと同じ行動ができない、個別の支援が必要である。授業中、出てきた言葉に過剰に反応し、担任に向かって一方的にしゃべり出すことがある」などの点が指摘されていた。保護者からだけでは得られない貴重な情報を得ることができた。

相談担当者から

本児は、母親に依存する気持ちが強いので少しでも自分でやるようにし、できたら褒める。担任に率直に気持ちを伝え、宿題を減らしてもらおうよう依頼してはどうか、あまり細かく間違いを指摘しないなどの話をした。

その後、学級担任と特殊学級担任が来所した。学級担任から、「学習は担任がそばについていないとやろうとしない。担任に褒められるとうれしくてがんばる。友達とかかわりをもつことができず、休み時間は一人でお茶を飲んだりして過ごす。母親に宿題を減らすことを提案したが、今までどおり出してほしいと言われた。問題は勉強より、友達とかかわることができず、担任が一对一で接しなくてはいけないこと。友達に本児のことをどう理解してもらおうかに悩んでいる」という話をうかがった。

相談担当者から

「独りでできる」、「自分からできる」ことを大切にし、自信をもたせてほしい。そのために、みんなと同じようにがんばっていることを伝え、友達の理解を得られるようにすること、学習面について、母親の理解を図り、本児のニーズを多面的にとらえることが大切なことなどを話した。

また、担任の勧めもあり、市内の相談機関で心理検査を受けた。諸検査の記録はWISC - 言語性IQ : 57 動作性IQ : 57 全検査IQ : 52, K - ABC 継次処理尺度 : 88 同時処理尺度 : 74 認知処理過程尺度 : 79 習得度尺度 : 68 非言語性尺度 : 95 であった。その機関では、IQは60程度で、知的障害の疑いがあるので、特殊学級入級と医療機関の受診を勧めた。しかし、母親は特殊学級に対し抵抗感があった。

前回の相談後、母親は本児が学校から持ち帰った感想文や観察日誌等を見て、通常の学級での学習は困難ではないか、特殊学級で手厚い指導を受けた方がよいのではないかと思うようになった。生活に必要な力を付けてほしいが、特殊学級なら可能だろうかとも考えるようになった。

**特殊学級担任と特殊学級入級について話す機会をもった。そこで、特殊学級の体験学習をしたところ、本人が特殊学級がよいと言い、後日両親が来校し、入級が決定した。**

本児は、特殊学級でも2年の教科書に沿って学習しており、個別指導なのでよく分かり褒めてもらえるので学校生活を楽しんでいる。祖父母もかわいそうだと思っていたのでこれでよかったと言ってくれている。母親も現在の本児の様子を見ていると「こんなにできることがあったのだ」という気持ちになり、これまで親の見栄や偏見で本児を苦しめていたとの思いを抱くようになった。

## 考察

通常の学級の友達とうまくかかわれるようにさせたい、通常の学級で学習を継続させたいという母親の思いや意気込みが、逆に本児を受身で自分から行動できないようにしていた。相談担当者は、本児には、机上の学習より必要なものがあると何度も伝えたが、なかなか母親に受け入れられず、結果がみえやすい漢字や計算の学習ばかりに取り組みさせていた。また、できる限り通常の学級に在籍させたいという思いもあり、母親の気持ちは大きく揺れていた。しかし、学級担任や特殊学級担任、市内の相談機関、医療機関、インターネット、そして、あゆみ相談と多方面からのアドバイス、情報を得ることで決断できたようだ。

相談を続けていく中で、母親に本児の障害を受け入れる気持ちが育っていった。それを待って、小学校や市内の相談機関、医療機関と連携を図ることができたことで特殊学級への入級がスムーズに進んだと思われる。

### (2) 研修支援活動（関係機関との連携、参加対象者の拡大）

今年度、地域の安城市立安城中部小学校と協力して研究を進めてきた。研究を始めるに当たり両校の担当で小学校と養護学校との連携について話し合った。その話し合いの中で、両校が互いに授業を参観したり事例を検討したりするほかに、本校において研修会（あゆみ研修会）を開催することにした。その際、小学校の授業づくりのため、児童が興味をもって取り組むことができる、題材、材料、補助具等の工夫がみられる「作業学習」の見学を中心にすることにした。また、当初本校地域支援部教員と安城中部小学校の特殊学級担当教員を対象として検討していた研修会を、もう少し多くの人に参加できるように安城中部小学校の担当者も属している安城市教育研究会の特別支援教育部会と共催で開催し、市内の関係者に参加を呼び掛けることにした。

当日は、安城市内の小中学校の特殊学級担当教員だけでなく、通常の学級の担任や保育士等を含め49名の参加があった。

小学部では、生活単元学習の自作プリントや大型遊具等、教材教具についての見学と模擬授業体験を行った。中学部では、5種目の作業について製品や補助具等の展示を行い、「アクリルたわし」の作業体験を行った。高等部は10種目の作業の製品、補助具の展示のほか、「紙工班(メモ帳)」「手工芸班(リース)」「封筒班」の3種目について作業体験を行った。また、自立活動部が例年本校教員対象に行っている自立活動の教材教具の展示を今回の研修会に合わせて公開した。

最後の質疑応答では「教材等のアイデアをどのように得ているのか」「材料はどうしているのか」等、学校ですぐに授業に生かすために具体的な質問を受けた。

また、次回以降の研修会の参考にするためにアンケートをとった結果、期日は夏季休業中がよいという意見や、逆に実際の授業を参観できる授業日がよいという意見、また、障害別指導法や教材教具の貸し出し、作成方法等、より具体的なことを知りたいなどの要望が寄せられた。

今回、本校の教材教具や指導上の工夫等を発表した。本校の教員からは、校内の資料が十分整理されておらず、有効に活用できていないと反省の声が聞かれた。自作の教材教具や指導上の工夫等を



参加者の作業体験

校内で共有できるシステム構築の必要性が痛感された。

### (3) 授業参観等（研究協力校との連携）

今回の研究では、前述の研修会のほかに愛知県総合教育センターの所員を招いた安城中部小学校での現職教育（「発達障害児の理解と対応」、「WISC - 知能検査の実施方法」）に本校教員も参加した。また、安城中部小学校特殊学級の授業参観と研究協議や、本校教員の安城中部小学校特殊学級での授業及び事例検討会等を行い、「気になる子」への理解について互いに理解を深めるよう努力してきた。

特殊学級の授業参観では、ふだんは県立と市立との違いからなかなか訪れる機会のない小学校の授業場面を何度も参観したり、協議を行ったりすることができた。本校中学部や高等部には、地域の小中学校の特殊学級を卒業した児童生徒も入学してくるが、その児童生徒たちがこれまでどのような学習をしてきているのかを知ることができ、指導の継続性や発展性のために貴重な情報を得ることができた。

## 3 まとめと今後の課題

「あゆみ相談」を始めておよそ2年過ぎた現在、以下のような点が課題となっている。

- (1) 近隣の幼稚園、小中学校、教育委員会等にリーフレットを配布したり、市町の広報誌に案内の掲載を依頼したりしているが、事業の認知度が低く、市内の教員でも知らない人がいる。
- (2) 数多くの事例を経験し、検査結果を評価する力と、その結果を指導に役立てる力を身に付ける必要がある。
- (3) 安城中部小学校と協力して研究を進めてきたが、ふだんは県立と市立との違いから連携する機会もあまりなかった。今回の研究を通し、気軽に行き来がしやすくなった。互いに学校を訪問、参観することで入学してくる児童生徒の入学前の姿を見たり、逆に安城中部小学校の教員に卒業生の成長した姿を見てもらうことができ、長期的な視点での指導の必要性が再確認された。今後も定期的に話し合う機会をもつなど、日常的に情報交換、相談のできる関係を構築していきたい。
- (4) 「あゆみ研修会」は研究協力校が安城市の学校ということで市内の関係者にしか案内しなかったが、来年度は本校の校区すべてに対象を広げ、より多くの教員と一緒に研修できるようにしていきたい。その際、地域のセンター的機能を意識した研修内容を設定したい。